

あとがき

3.11以来、何度か成田空港を利用した。海外から成田空港に到着し、迎えの車を待っている間、いつものように、17番停車場に佇んだ。3.11に地震に遭遇した場所だ。その場に立ち、迎えの車を待っていても、いつも3.11を思い出す分けではなかった。

だが昨秋、フランクフルトから帰国したとき、迎えの車で駐車場に向かう途中で、同乗者と3.11の話しになった。その時、運転手はその話に割り込んで来て、三者がそれぞれに3.11の自分の様子を語った。それまで、迎えの車の運転手と旅の思い出以外の話をしたことはなかったのだが。

一人一人の3.11があり、一人一人の胸に刻まれた思いがある。

3.11の経験の仕方に関わらず、3.11は、人々が、それぞれの人生を振り返るときの一つのポイントとして、長く心に留まることであろう。その人の人生の歩みがそこに行き着く話しか、そこから始まる話しか、は別として。

現実には、言葉より確かに現実である。「百聞は一見に如かず」とも言う。しかし、言葉で語り合うことが現実をより鮮明に浮かび上がらせ、現実をより人々にリアルに定着させる役割を担うこともある。

「災害と鍼灸」シンポジウムは、災害時や緊急時の医療と鍼灸について、思いを巡らせる機会だった。

毛沢東の長征時代には軍人の健康管理に鍼が使われた。災害時（中国では、戦時であったが）、鍼が役立った経験は、中華人民共和国設立後、鍼が西洋医学と同等の地位を与えられて、中国の人々の健康に寄与する制度に発展し、現在に至っている。ミハエル氏や小野氏の話は、そのことを思い出させるが、樋口氏、三輪氏、伊藤氏の災害現場での活動の話しも、考えてみれば、毛沢東長征時代の鍼の役割に重なる部分があり、また、その後の「赤脚医生」の活躍にも継がる。

今回のシンポジウムは、社会鍼灸学研究会では初めて、他の組織と共催した。全日本鍼灸学会の後藤先生から共催の申し出があったとき、鍼灸の可能性をより多くの人々と語り合うことは意味があると感じ、快諾した。

シンポジウム開催に当たって、講師の何人かは、交通費のみで、また、中には交通費も辞退されて講演して頂いた。社会鍼灸学研究会6回の中では、初めてのことであったが、講師の先生方のそれぞれの気持ちを汲んで、お申し出のようにさせていただいた。また、東京有明医療大学のホール使用料も便宜をはかっていただいた。「災害と鍼灸」シンポジウムは、多くの方々のボランティア精神のお陰で、実現し、実施することができた。

厚く、お礼を申し上げたい。

形井秀一

社会鍼灸学研究会 共催 全日本鍼灸学会

「災害と鍼灸」シンポジウム

開催日：2011年8月20日

会 場：東京有明医療大学 HANADA HALL

参加者：130名

災害と鍼灸

－東日本大震災に鍼灸はどう取り組んだか－

社会鍼灸学研究 2011 特集号

「災害と鍼灸」シンポジウム・記録集

発行日 2012年8月1日

編集・発行 社会鍼灸学研究会

〒305-8521 つくば市春日4-12-7

筑波技術大学保健科学部

形井研究室

Tel&Fax：029-858-9533

e-mail：katai@k.tsukuba-tech.ac.jp

URL：https://sites.google.com/site/shehuizhenjiuxueyanjiu/

表紙・題字 堀 紀子（瑞雪）

筑波大学大学院 人間総合科学研究科
フロンティア医科学専攻 疫学分野
